

小さく始めて大きく育てる

“現場に響くDXの育て方”

東北日東工器株式会社

2025年12月12日 藤森・小倉



はじめに	1. 会社概要
DXについて	2. DXのイメージ
	3. DXの転機
事例紹介	4. 事例紹介① 「納品通知アプリ」
	5. 事例紹介② 「工具管理システム」
まとめ	6. 得られた成果
	7. まとめ

1. 会社概要

会社概要



会社名

東北日東工器株式会社

体表取締役
社長

千葉 隆志

設立

1979年(昭和54年)12月24日

資本金

9千万円

従業員数

204名(2025年6月1日時点)

事業内容

機械工具、電動ドライバ「デルボ」、
建築機器(ドアクローザ)

主要株主

日東工器株式会社



工場外観（設計：隈研吾氏）



福島の杉の木を使った自然と調和するデザイン



2. DXのイメージ



巨額の予算



最新システム

**DXと聞いて、
何を思い浮かべますか？**



ITエンジニア



予算



最新システム

実は...
どれも必要ありませんでした。



ITマン

多くの企業が抱える、共通の課題

何から始めれば
いいの？

うちには
予算がない

現場が受け
入れてくれない





私たちも数年前、 DXに挫折しました。

マイコンやIoTに興味はあったが
「設定の仕方が分からない」
「コードが書けない」
という技術の壁に直面

初歩の段階でつまずき、
諦めてしまった経験があります。

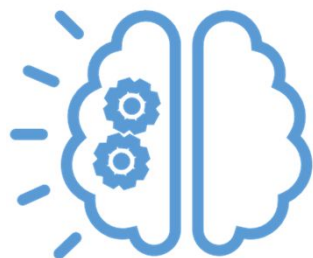
3. DX推進の転機



「生成AI」の登場によって
高くそびえ立っていた技術の
壁が一瞬でなくなった。

「こんなことがしたい」と話しかけるだけで、AIが設定方法やコードを
教えてくれる。

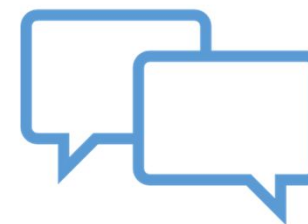
必要なものは、手元にあった。



生成AI



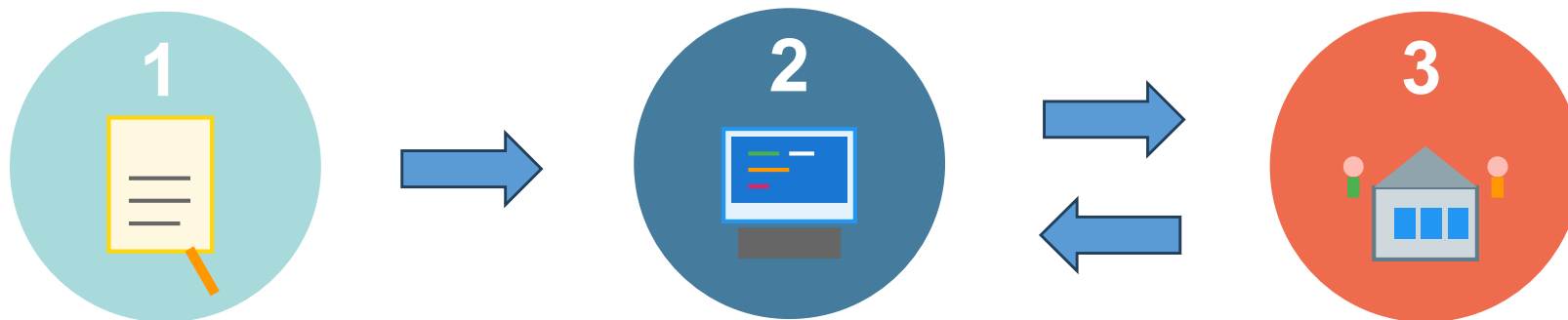
IoTデバイス



標準搭載のアプリ

これらを組み合わせるだけで、
できることはたくさんある！

生成AIを活用した内製化3ステップ



要件定義

「何を作りたいか」
「誰の何を楽にしたいか」
を書き出す。

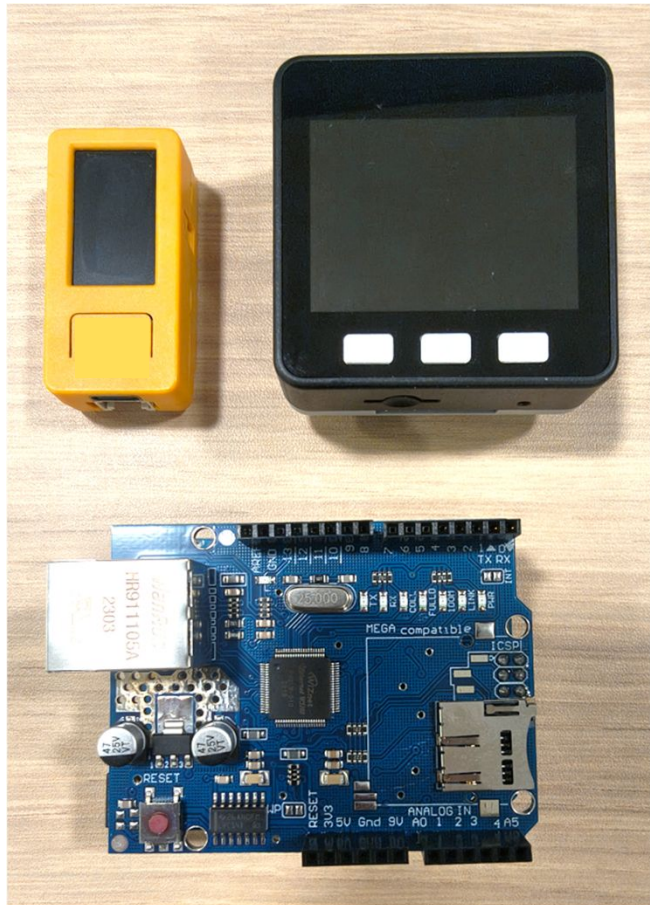
コーディング

書き出した要件を
生成AIに指示して
試作コードを作る。

検証と改善

完璧を目指さない。
小さく作って
すぐに現場で試す。

実際に使っているのは、こんなデバイスです。



- 小型で扱いやすい
- ディスプレイ付き
- Wi-Fi機能搭載
- 価格も手ごろ（数千円程度）

「失敗しても痛くない」ことが、小さく始めるためのポイント。

4. 事例紹介①

納品通知アプリ



【現場の課題】 月初になると大量に届く荷物

従来の方法



- 受け入れ担当者が送付状を確認
- 納品先の担当者へ一件ずつ電話連絡
- 「もしもし、〇〇さん？荷物届いてますよ」

【改善策】スマホで撮って、タップするだけ



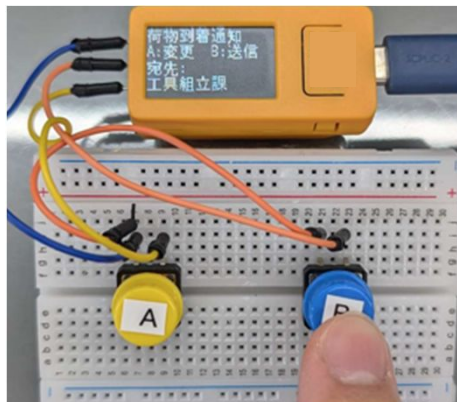
- ① スマートフォンで荷姿を撮影
- ② 通知を送りたい部署をタップ
- ③ 自動でグループチャットに画像付きで送信

事例① 納品通知アプリ

小さく始めて、現場で育てたプロセス



STEP1



まずは通知機能
だけを試作



STEP2



カメラ機能を
追加する



STEP3



スマホに機能を
集約する

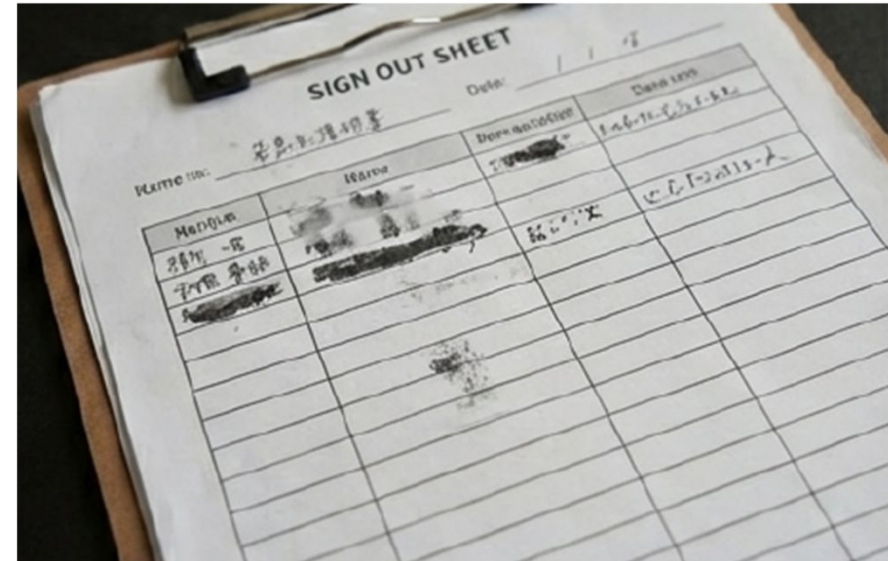
5. 事例紹介②

工具管理システム



事例② 工具管理システム

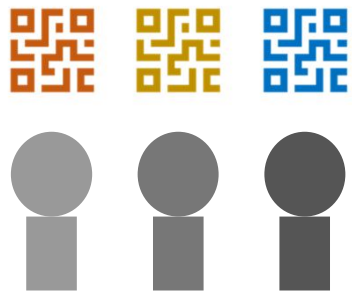
【現場の課題】 あの工具、今どこにある？



- 課員共通で使用する工具箱を、誰が持ち出したか不明
- 紙の持ち出し管理表は、忙しいと記入漏れが発生
- 探す手間、見つからないストレス

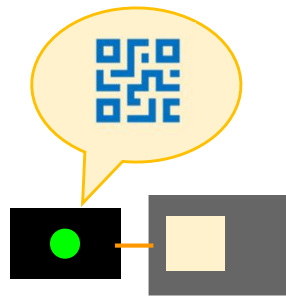
【改善策】 安価なデバイスとQRコードで、 「誰が」をリアルタイムに共有。

1



課員全員に
QRコードを付与

2



読み取り端末で
QRコード認証

3



照合されたら
保管棚が開錠

4

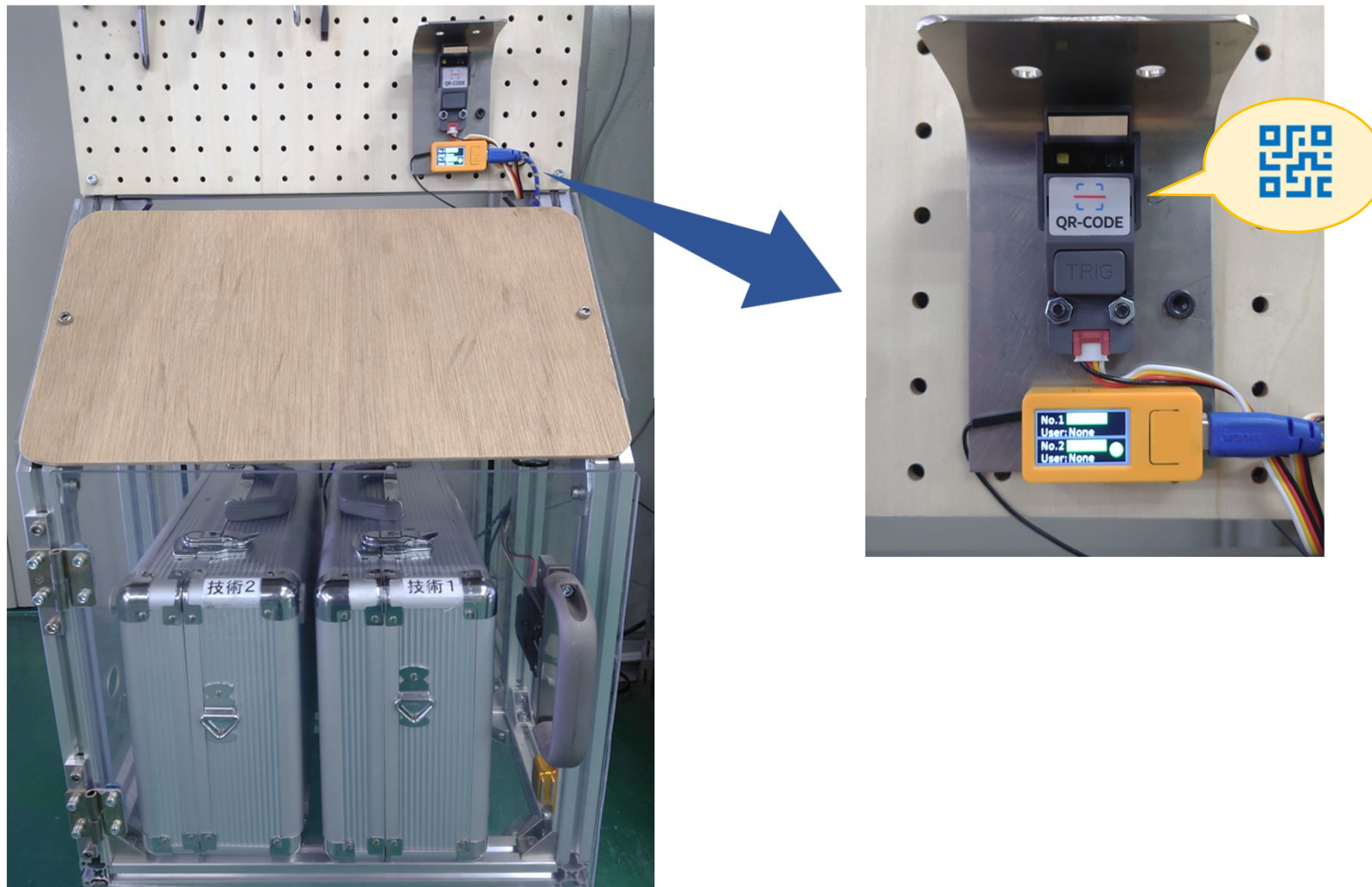


チャットで
貸出の通知

※QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です

事例② 工具管理システム

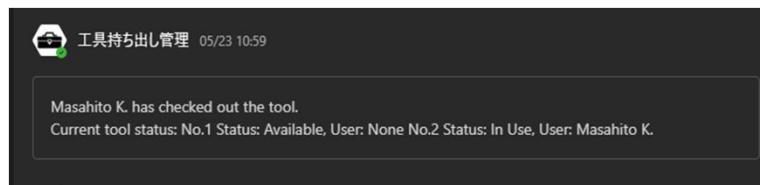
読み取り端末でQRコード認証



※QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です

事例② 工具管理システム

リアルタイムで「今の状態」が分かる。



No.1「貸出中」

貸出時間・貸出者を表示

No.2「未貸出」

「User:None」と表示

貸出記録を
グループチャットで通知

6. 得られた成果



小さな成功

個々の成果物は
5分程度の改善効果



大きな成長

小さな成功体験が
DXの意欲と発展
に繋がっていく



現場のちょっとした困りごとを、確実に解決していくこと。

7. まとめ

身近な課題から始める

大きなビジョンではなく

「明日が少し楽になること」

を考えてみる。



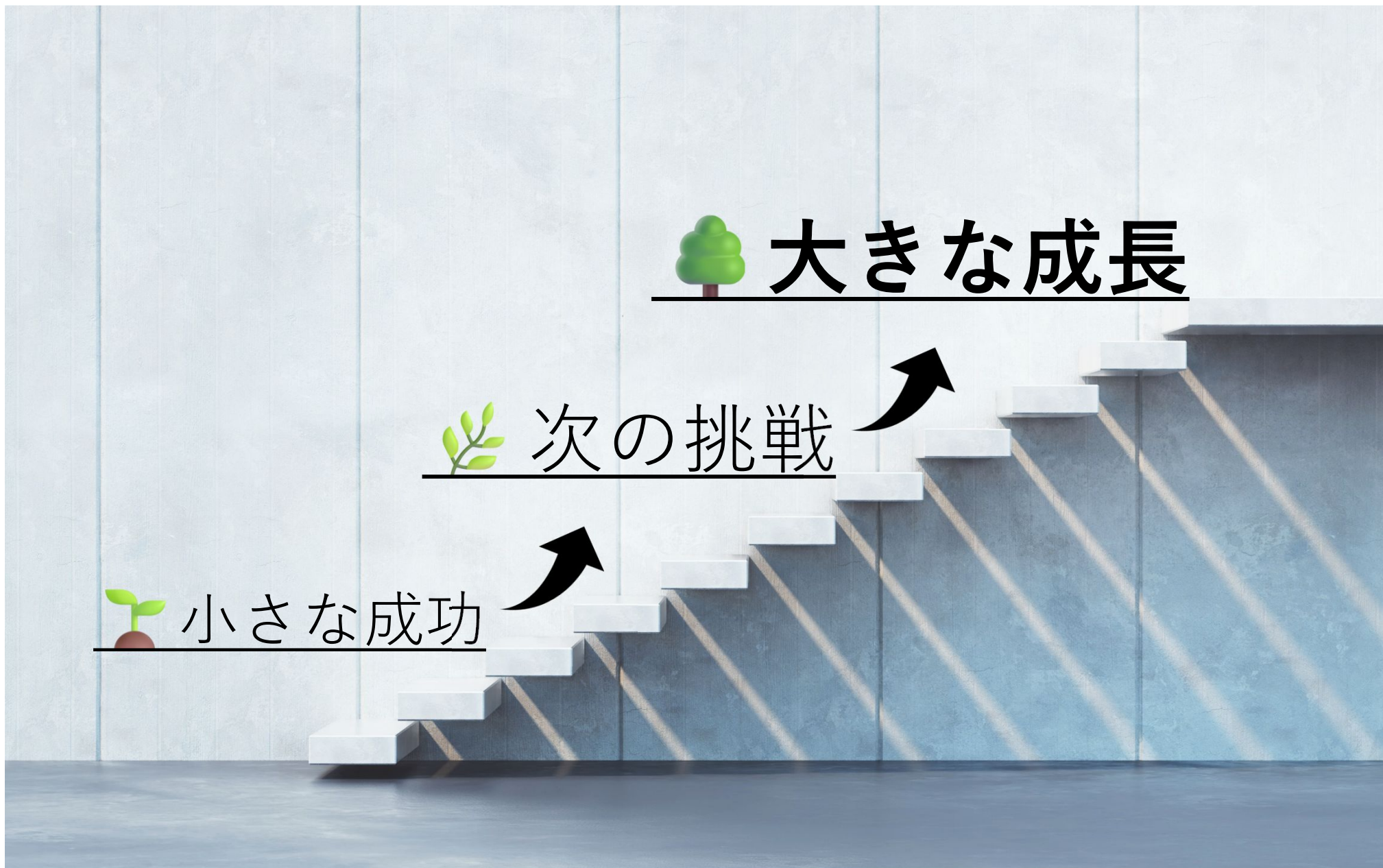
自分たちで内製化する

現場の課題を一番よく知る、

現場の担当者と一緒に作りあげる。



DXを推進する中での変化



DXを推進する中での気づき

DXは、
「導入」するものではなく
「育てる」ものだ。



「明日、誰かの仕事を5分だけ
楽にするには何ができるだろう？」



その答えが、あなたのDXの第一歩です。

ご清聴ありがとうございました